

---

# 魔導戦記リリカルなのはStratoS

杉並

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはStratos

### 【Nコード】

N2552BA

### 【作者名】

杉並

### 【あらすじ】

3年前の第2回IS世界大会モンド・グロツソ、織斑千冬は弟の一夏よりも「ブリュンヒルデ」という称号、栄誉を優先した。絶望する一夏だったが、彼は別の青年に助けられそして自らの意志で別の道を進むことを決意しこの世界を離れた。3年後に戻ってきた彼の目に自らの生まれ故郷はどのように映るのだろうか…

魔導戦記リリカルなのはStratos、始まります。

## 第1話「出会い」（前書き）

累計アクセス数が1000を超え、ストーリーの方も少しずつですが出来上がってきたので、このたび連載することを決意しました。

更新は最低でも週1のペースを崩さずにやっていけたらと思っています。

第1話は読切りと変わっていないので、すでに読んだ方は第2話からお進みください。

では、小説の方へとお進みください。

## 第1話「出会い」

結局、自らの姉は俺を助けには来なかった。彼女は9つ下の弟の命よりも「ブリュンヒルデ」という称号、榮譽を優先したのだ。

薄汚れた廃工場の柱の1つに縛り付けられながら少年は絶望した。

——お前の家族は私だけだ——

両親が消えた時に姉が俺に言い聞かせた言葉が思い出された。あの言葉は嘘だったのか。俺はその言葉を信じて今まで生活してきた。わがままも言わず、姉の不慣れな家事も全部担当してきた。なのに、それさえも否定されたように思えた。

そんな時だった。青白く光る閃光が壁を打ち抜き、俺の周りにいた数人の誘拐犯を吹き飛ばしたのだ。

壁を打ち抜いて廃工場の中に入ってきたのは青のラインが所々に入った白い服を身に纏い、両手に銃——そうはいつでも普通の銃ではなく、ロボットアニメに出てきそうな銃——を持った一人の青年。

先ほどの青白い閃光に唯一巻き込まれなかった誘拐犯がようやく我に返り、IS——<sup>うちがね</sup>打鉄——を身に纏い、入ってきた青年に何か叫んだ。

当時の記憶が既にあやふやになっていることもあってか、何と言っていたのかは詳しく覚えていないが、「何者だ貴様、止まれ！」みたいなことを言っていたのだろう。

しかし、その青年は聞く耳を持っていないのかお構いなしに歩を進める。

それに激昂した誘拐犯は近接用ブレードを展開して青年に突撃した。

――ISに勝てるのはISだけ――

それがこの世界の一般常識だった。そしてそのISを扱えるのは女性のみ。この場面のみを誰かが見ていたのならその誰もがISを纏った女性が勝つと信じただろう。

だが、その予想は大きく外れることになる。

その青年は右手に持っていた銃を誘拐犯に向ける。その銃口には青白い光が集まっていた。

もしこの時、誘拐犯が冷静な判断ができていれば結果は違っていた

のかもしれない。その銃口に集まっている光の色が自分の仲間を吹き飛ばした青白い閃光と同じ色であったことに気づき、とっさに回避していればあんな一瞬で終了することはなかったのかもしれない。

「???」考えもなく怒り狂って突っ込んでくるのは頭の悪い奴がやることだ。」

青年は呆れた口調でそう言い、銃の引き金を引いた。

その瞬間、銃口に集まっていた青白い光は誘拐犯に向かって解き放たれ、その言葉通りISごと誘拐犯を呑み込み、反対側の壁を打ち抜いて吹き飛ばした。

「???」「やばっ、出力抑えたはずなのに…またなのはに怒られるな。」

青年の顔はやりすぎたといった表情をしながらも俺のそばにやって来る。

「???」「ちよつと動くなよ。」

そう言いながら銃口から放出される青白い光をナイフのような形に固定して俺を縛っていたロープを切断。そして俺の頭に手を乗せて

こう言った。

???「一人でよく頑張ったな、もう大丈夫だ。」

たった一言。けどその一言が俺の心にため込んでいた何かを一気に放出させた。少年は助けってくれた青年にしがみついて泣いた。ただ、ただ泣き続けた。

数年後、あの時どうして泣いていたのかを聞いてみると少年は恥ずかしそうにこう言った。

「あの時の俺は、多分さびしかったんだと思います。」と。

どんなに頑張っても褒めてくれる人はいなかった。運動会で1位を取っても、テストで満点を取っても誰も褒めてくれず、「取れて当然」のような反応をされてきた。ずっと姉と比較され続けてきた。だけど、ただ一人の家族である姉のため、とひたすら我慢してきた。だけど、本当は褒めてほしかった、一緒に喜んでほしかった。たった一言でいいから「頑張ったね」と言っただけでよかった。

しばらくたって俺は落ち着きを取り戻し、そしてサイレンの音が鳴っているのに気付いた。その音はだんだん大きくなっていく。こちらに向かってきているのだらうと簡単に予想できた。先ほどの爆発音を聞いて黙っている人の方が少ない。

俺を助けてくれた青年は周りの状況を理解しているのか「巻き込まれたら面倒だからさっさと帰るか」と言って去ろうとしていた。そんな彼の手をいつの間にか俺は掴んでこう言った「俺も連れて行ってください」と。

いきなり手をつかまれた彼は最初は困惑していたが、俺の目をじっと見てこういった。

???「俺が進んでいる道は険しくてつらい。それでもついてくる覚悟が君にはあるか？」

俺は彼のその眼を見て彼がその言葉の通り今まで非常に厳しくつらい経験を踏んで来たのだらうと感じた。その中には悲しい別れもたくさんあったのだらう。もし彼と同じ道を進めば俺も同じ経験をすることになるのかもしれない。だけど俺はこの世界を自分の目で自分の肌で自分の身で知りたいと思った。たとえどんな悲しい経験をしたとしても俺は知りたいと思った。

だから俺は「はい」と言って掴んだ手をギュッと握りなおした。

少年は「魔法」と出会い、自分が生きてきた世界の、そして両親失  
踪の本当の真実を知る。

自分の世界に潜む闇を知り少年はどう思うのか。

物語はこの事件の3年後、この世界に再び少年が戻ってきたところ  
から始まる。

胸に抱くは不屈の心、その手に持つは魔導の力。

愛機と共に立ち向かうは女性にしか扱ふ事の出来ない兵器、インフ  
イニット・ストラトス。

魔導戦記リリカルなのはS t r a t o s

青年との偶然の出会いが少年の運命を拓き、少年―高町一夏―は空  
を駆ける。

## 第1話「出会い」（後書き）

ご意見や誤字脱字等の指摘がありましたら感想の方をお願いします。

オリジナルキャラクター（以降、オリキャラ）はできる限り第1話に出てきた謎の青年以外には出さないように進めていく予定です。

（オリキャラを出しすぎると読みにくくなりそうなので…）

それでは第2話でまたお会いしましょう。

## 第2話「入学」（前書き）

お待たせしました、記念すべき連載第2話です。

今回の物語はISの世界を軸として、その世界になのはのメンバーが関与していくといった話にする予定です。

第2話では、なのはの主要メンバーがほんのちょっとだけ出てくる  
…かも。

## 第2話「入学」

一夏「（…いくらセシルが同じクラスにいるからってこの状況はさすがにきつい。）」

俺以外のクラス全員…というよりもこの学園に通う生徒は俺以外全員女子生徒。学園職員も用務員に成りすましている本当の学園長を除いて全員女性。それに加えて座席が最前列と真ん中というクラスほぼ全員からの視線を集める絶好の位置。まさに四面楚歌。

一夏「（藍越学園で学生をしながらこの世界の状況について調べてくるのが今回の俺の任務の目的だったのに、よりによって座標ミスって転送位置がズレただけじゃなく、飛ばされた場所に置いてあったISに触れて起動させちゃうなんてな…マジで情けない）」

ちなみにそのことをみんなに話したら「いやいやさすがにそれはないでしょ」って顔された。太一さんとタヌキ（はやて）さんについては大爆笑。

俺はあの時ほど「穴があったら入りたい」と思ったことはない。

一夏「（しかもそのせいで世界で初めてISを動かした男という立場からISを調べてこいっていう追加任務まで課せられるなんて…鬱だ。）」

「はあっ」と大きなため息をつく。しかし、何事も前向きに考えるという持ち前の性格ですぐさま気持ちをあらため、この3年間で習得した並列処理を活かして現時点で発生している問題とその解決策について考えていく。

一夏「（まあ、起きてしまったことはしょうがないとしてこれからどうするかだな。国籍についてはイギリス政府の努力もあって自由国籍権を取得できたけど今後どうするかを考えていけないといけない。ISの情報収集についてはこの学園に入学したことで藍越学園にいる場合よりも洗練された情報が入手できる、ISがどうして俺に反応したのかについては実際にISに乗って調べてみないとわからない、それから俺の機体は…）」

並列処理は一般的な魔導師で3つか4つ程度しかできない。これは人間の脳が与えられた情報を処理する能力に限界があるためだが、一夏はそれを最大15個まで並行して考えることが出来る。現在並行して考えている情報は10個、あと5つ考えることが出来る点を考慮すれば脳への負荷はそれ程大きくはない。だが一夏は8個以上の情報を並行して考える時、脳への負荷を小さくしようとして思考のみに意識を集中させてしまうという癖があった。

だからだろう、教室に副担任が入ってきて自己紹介したのにも、クラスメイトの自己紹介が始まったのにも気づかなかったのは…

「???」  
「…ちかくん、高町一夏くんっ」

一夏「へっ、あっはい。」

下に向けていた顔を上にあげると副担任の：確か山田先生（下の名前は忘れた）が机の前まで来て俺の名前を呼んでいること、そしてまたいつもの悪い癖が出ていたことに気付く。どうやら自己紹介が始まっていて俺の順番まで進んできていたらしい。セシルの方をチラリと見ると「またですか、もう。」といった顔をしている。

山田先生「あっあの、お、大声出しちゃってゴメンね。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、本当にゴメンね！でもね、あのね、自己紹介が、『あ』から始まって今『た』の高町くんの番なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？それともやっぱり、だ、ダメかな？」

目の前で山田先生が今にも泣きそうな声で頭をぺこぺこ下げてお願いしていた。

一夏「あ、ちよつと考え事していただけなので怒ってませんし、そんなに謝らないでください。自己紹介もちゃんとしますから、先生落ち着いてください。」

山田先生「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

…本当にこの人は教師なのだろうか、という疑問を持ちながらも一夏は立ち上がり、後ろを振り向く。今まで背中に感じていた視線を今度は正面から浴びる格好。

一夏「（なのは姉も教導の際にこんな感じでいろんな視線を浴びてたんだな…）」

自分の義姉のなのはが教官として多くの魔導師の前に立った際に浴びる視線に近いものを自分も浴びていることに気づき、一瞬しみじみとした思いになりながらも気持ちを引き締めてこう言った。

一夏「初めまして、イチカ・タカマチです。日本生まれのイギリス人でしたが、現在は様々な国の思惑のせいで自由国籍権を取得し、所属は決まっていない状況にあります。変に馴れ馴れしく接すると国際問題になりかねないのでその点にはみなさん注意してください。」

## 第2話「入学」（後書き）

ということで第2話でした。いかがだったでしょうか。これからもコツコツと話を進めていく予定ですので、今後も宜しく願います。

ご意見、ご感想、誤字・脱字等につきましては感想の方をお願いします。

次回、第3話「再会」

一夏はこの学園で会いたくなかった人と3年ぶりの再会を果たす。

### 第3話「再会」(前書き)

現在第4話＋主要人物紹介を鋭意執筆中。

主要人物紹介はおそらく一夏が筈と話をした後くらいになるかと思っています。

では本編の方へ。

### 第3話「再会」

Side 一夏

自己紹介を終えた瞬間、自分の頭めがけてナニカが振り下ろされることに気付いた。自己紹介中に誰かが前のドアから教室に入ってきたのには気づいていたから、その誰かが俺に対してナニカを振り下ろしているのだろう。

一夏「（…山田先生じゃないな。）」

山田先生は俺の左の方で「た、高町くん、その、そういう自己紹介だと、お、お友達、できないよ。もうちょっと、じ、自分の趣味とか、と、特技とか話してくれないかな？」みたいな表情をしてこっちを見ているからだ。

そんなことを考えている間にも俺の頭に近づいてくるナニカ。そしてそれが頭に直撃する寸前、そのナニカは山田先生の顔の前を通り過ぎ、教室のドアにぶつかった。一夏はそれが何であるのかを横目でちらりと確認すると薄い長方形の形をしたものであることを確認した。蹴り飛ばした時に感触からあれが出席簿だろうと推測。そして再び視線を前に向けると、そこには二度と会いたくもなかった人物が立っていた。

Side out

Side セシル

セシル「（先ほどのシーンはみなさんの目にはどのように映ったのでしょうか…おそらくは、黒板に背中を向けていた一夏さんがいつの間にかこちらに背を向けていて、担任と思われる人の手にあった出席簿がこれまたいつの間にか教室のドアにたたきつけられていた程度の認識しかできていないのでしようけれど。）」

頭に振り下ろされていた出席簿を一瞬で蹴り飛ばした一夏の姿を見ながらセシルはそのようなことを考えた。その一連の動作が完了するまでにかかった時間は1秒にも満たない僅かなものであったからだ。その様子をただ見ていただだけのクラスメイトのほとんどはセシルの考えているようにしか先ほどのシーンを認識できていないことは間違いない。

セシル「（それとほんの僅かではありましたが、一夏さん、魔法を使用したみたいですね。使用した魔法は身体強化と出席簿を蹴り飛ばした右足の加速…といったところでしょう。こちらは後ほど一夏さんに確認をすることにしましても…自らの姉だった方が担任になるなんて、一夏さんにとっては大変いやでしょうね。もちろん私が一夏さんの立場でもこちらからお断りしたいほどいやですけれど。）」

セシルはそのようなことを考えながらも一夏と彼の目の前に立っている教師をジッと見る。二人とも無言ではあるが、一夏の目が相手を射殺すかのような目をしていることにセシルは気付いた。そして次の瞬間、一夏の口が動いた。

S i d e   o u t

S i d e   一夏

この学園で教師をしていることは知っていた。だが、自分の担任になるとは思っていなかった。その教師の本来の担当学年は3年であり、そしてこの学園の教師の担当学年が変更になったことは今までにないということを事前調査で確認していたからである。

一夏「（…俺という男性操縦者イレギュラーとそれによって発生する可能性の高い俺を巻き込んだ事件に対して迅速に対応できるだけの判断力や実力を持った教師を選んだということか。やっぱりあの用務員がくえんちよう、ただ者じゃないな。となると、頼りなさそうな感じではあるけど山田先生も相当の実力の持ち主ってことになる。」

顔には出していないが、今までに得られていた情報とは異なる事実に一夏は内心、驚いていた。しかし、すぐさま気持ちを切り替え、そこから得られる情報や考えられる可能性について導き出していく。そして、そのようなことを考えながらも一夏はこう思っていた。

一夏「（…しかしまあ、よくも何事もなかったかのような顔をして俺の前に立てるな。）」

そつ、目の前に立つのは3年前、家族の命よりも自らの肩書・栄誉

を優先した人間、かそくだったひと織斑千冬だった。そのような人を前にして一夏はこう言った。

一夏「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなってないんじゃないんですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

S i d e   o u t

3年前の誘拐事件から約3年、2人の姉弟は再会を果たした。姉であつた千冬にとっては嬉しい再会だった。何せ3年間行方の掴めなかつた弟が今、目の前に立っているのだから。  
しかし、弟であつた一夏にとっては二度と会うことはないと思つていただけのことであつてか最悪の再会であつた。

### 第3話「再会」（後書き）

3年ぶりの再会は感動の再会：にはなりませんでした。出来る限り原作に忠実に、しかしオリジナルティーを加え原作とは違ったストーリーで物語を進めています。が、「もっとこうしてほしい。」「こういった展開が見たい」といったご意見がありましたら感想の方へよろしくおねがいします。

### 第4話「真実」

イギリス国籍だった一夏が自由国籍権を取得せざるを得なかった理由、そして皆が知らなかった一夏誘拐事件の真実の一端が今、明らかになる。

#### 第4話「真実」(前書き)

3年ぶりの再会：本来であれば嬉しいもののはずなのに、その再会  
は彼―高町一夏―にとっては非常に不快なものだった。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第4話「真実」、始まり  
ます。

#### 第4話「真実」

一夏「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなっていないんじゃないんですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

二人の3年ぶりの再会で初めて交わされた言葉は感動的なものではなく…

千冬「…それはお前の自己紹介の内容に問題があったからだ、織斑。」

そしてその言葉に返された返事もまた冷たいものだった。

一夏「問題…ねえ。ですが俺が言ったことは事実でしょう？ISを起動させてしまった時の俺の国籍はイギリス国籍だった。だからイギリス政府は俺をイギリスの代表候補生の一人としてこの学園に入学させることにした。だけど、いきなり日本政府が『彼はイギリス国籍を有しているかもしれないが、日本で生まれ、今までの人生の半分以上を日本で過ごしている。その点を考慮するならば彼の所属は日本にあるべきだ。』って主張した。」

千冬「…」

一夏「そして、日本政府のその発言を発端にアメリカやロシアなどの諸外国が何かと理由をつけて俺を自国の所属にしようとした。『敗戦国の日本の復興に大きく貢献した我が国は日本に大きな貸しがある。ならその貸しを彼の所属権を我が国に引き渡すことでチャラにしようじゃないか』とか言ってるね。完全に俺はモノ扱いだ。」

山田先生「えっ…そ、そんな…」

一夏「事実ですよ、山田先生…話を戻します、各国の首脳は俺の所属を巡って意味のない議論ごうごうぎろんを繰り返した。連日、夜遅くまで…ね。」

クラスメイト「…」

一夏の口から出てくる自分たちの知らなかった事実、セシルを除く学生達はただ黙って聞くことしかできなかった。

一夏「ただどころか議論しても解決策が出てこないことに…一部の国々《所属権を主張しなかった国》の首脳たちが不満を持ち始め、そしてついに爆発した。『私たちは一体何のためにここに集められたのか』ってね。結局この不毛な言い争いはイギリス政府が『ならば彼に自由国籍権を与え、IS学園に通う3年間の中で様々な国の生徒と交流して、どの国に所属するのかを決めさせればよい。』と提案し、それを首脳たちが満場一致で賛成したことでようやく解決した。もちろんその提案に不満を持っていた国もあったみたいだけ

ど、それ以上に解決策も見えず、時間だけがただ過ぎていくことに不満を持っていた首脳たちの方が多かったから、認めざるを得なかったんだけどな…それと織斑先生、俺のファミリーネームはオリムラじゃなくてタカマチです。」

自らの自由国籍権取得の本当の真実を話し終えた一夏は、最後に織斑千冬が口にした間違いを訂正した。

千冬「っ…いや、お前が何と言おうとお前は織斑一夏であり、私の…弟だ。」

その事実にはクラスがざわついた

生徒A「え…？高町くんが、あの行方不明になってた千冬様の…織斑先生の弟？」

生徒B「それじゃあ、ISに乗れるのもそれが関係してるってこと？だけど、今の名字が『高町』になってるのには何か理由があるの…？」

教室中に飛び交う様々な憶測、そしてその内容のほとんどが一夏と千冬の関係について。この二人の関係が良好なものであれば、教室中に飛び交う内容など特に気にするようなものではない。しかし、今の一夏にとってその話題は苦痛以外の何物でもなかった。

彼はあの事件の時、織斑千冬実の姉だった人と決別すると心に決めた。「たった一人の家族」と言いながら助けに来なかった人を尊敬できる姉と見ることはもうできなかった。

だからこそ一夏は片手を机にバンツと叩きつけ、クラスを黙らせてからこう言った。

一夏「『私の弟』だって……？笑わせるなよ。あんたが、俺の……俺の姉であるものか！3年前のモンド・グロツソの決勝戦の時、俺の命よりも自らの栄誉を……肩書きを選んだ、あんたを姉……いや、家族だなんて認められるかよ！」

そう言い残し、一夏は教室から出ていった。この時間は本来授業時間なのだが、彼の口から発せられた驚愕の事実、彼の行動を止めようとする者はだれ一人としていなかった。

## 第4話「真実」（後書き）

以上、第4話でした。

まえがきを見て『あれっ?』と思われた方もいるでしょうが、4話以降の本編の前書きはこの形で統一していると思っております。余裕があれば1〜3話の前書きについても訂正していく予定です。それでは今回の話はこれで。

## 第5話「相棒」

屋上で一人、考え事をする一夏。そんな彼のもとに彼の相棒パートナーであり、良きライバルである彼女が訪れる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2552ba/>

---

魔導戦記リリカルなのはStratoS

2012年1月7日07時46分発行